

アート & テクノロジー東北2025 講評

昨年度、コロナ禍以降における対面開催の再開・継続という状況の中で、本イベントでは集客の課題が浮き彫りとなり、今年度の開催に向けても不安が残るスタートとなりました。昨年は、展示者同士の交流を主な目的とし、なんとか継続の形をとるという判断に至ったのが実情です。

しかしながら、そうした消極的な見通しや懸念は、結果的に杞憂に終わりました。おかげさまで、今年度も会場は展示者・来場者ともに熱気に満ち、非常に活気のあるものとなりました。

審査の結果、最優秀賞となったのは「GluGluGlobe360（ぐるぐるぐろーぶさんろくまる）」（NHK盛岡放送局コンテンツセンター、荒井敦志さん・小方裕貴さん）です。NHK盛岡で制作された祭りやスポーツ、地域文化を題材にしたVRコンテンツを360度映像視聴システムで閲覧できるように開発されました。この映像視聴システムでは、球体型スクリーンに投影されるため、その場で複数人が同時に鑑賞できます。VRゴーグルや大規模設備を必要とせず、ゲームコントローラで映像を自由に回転操作できる点が高く評価されました。

優秀賞には、「さわって つくる 迷路」（一関工業高等専門学校、佐々木優人さん）、「The shortest letter in the world」（岩手大学、迷歩 Maigo：柳谷快步さん）、「モニターを使った作品」（岩手大学、小高悠幹さん・小高健幹さん）の3件が選ばれました。

「さわって つくる 迷路」は、壁に投影されたマス目状の迷路をタッチ操作で自由に描き、スタートとゴールを設定して道筋を作るインタラクティブ作品です。タイルは触れるたびに色が変わり、迷路を自ら構築することができます。マーカーのあるカードを並べて迷路を進むための命令をセンサーで読み取り、それが正しいか実行することで体験的にプログラミングの基礎を学ぶことができる仕組みが評価されました。

「The shortest letter in the world」は、繊細で精緻な手描きの迷路の展示です。そこにはクエスチョンマーク「？」が迷路で描かれており、この迷路を解き進むことによって、その軌跡がエクスクラメーションマーク「！」として浮かび上がります。アート性とプログラミング技術などによって、さらに展開の可能性を感じさせる作品が評価されました。

「モニターを使った作品」は、机上に小さなモニターを配置したものに、分割した偏光板が張り付けてあるフレームを置いていくことで目に見える色の変化を起こさせるもので、モニターも同形状の分割と色彩の調整がなされているため、型はめパズルのようになつだけ正しい置き方があります。このような偏光板による現象を活用して楽しく遊べる作品が評価されました。

その他に、審査員特別賞として「だれにも、いわないで。」（GO=ROUND、よしたけ なつきさん・大町秀太郎さん）、「一心同対戦」（岩手大学、高橋咲さん・清水翔太さん・近藤光さん・大井陽喜さん・澤田昌弥さん）、「Particle Controller Ver.01」（秋田公立美術大学、岩田陽理さん）、「モーションキャプチャーを利用したインタラクティブアート」（岩手大学、太田遥斗さん）、「筆veat Pro」（八戸工業高等専門学校、竹内開徒さん・佐藤亮介さん・細川靖さん）の5件、海外特別賞に「2D Animation for Song Named "My book"」（Munkhzaya.Zさん）、「“KHUREE” map design for Counter-Strike 2」（Enkhbaatar.Oさん）、「"Erkhii Mergen" Animation」（Enkhbadrakh.Gさん）、「"Interrupted Breath" Short Animation」（Erdenebileg.Gさん）「3D Development of a Selected Cultural Heritage Artifact」（Amgalan.Eさん）の5件、奨励賞（学部生までを対象）に、「BEAT FIGHTER（八戸工業高等専門学校、西村将さん・細川龍一朗さん・赤沼秋星さん・窪田皓史さん・中田煌人さん・三浦士さん・細川靖さん）」、「化粧土を用いた立体作品」（岩手大学、上日向花菜さん）、「Perfume of memory」（国際アート&デザイン大学校、神長羽音さん）、「ドラゴン」（国際アート&デザイン大学校、横田涼雅さん）の4件が選ばれました。

特筆すべきは、優秀賞の「The shortest letter in the world」と奨励賞の「化粧土を用いた立体作品」は、いずれもアナログ手法による作品であったことです。デジタル技術とは対照的な手仕事による表現でありながら、「アート&テクノロジー」の両極のバランスや連携の可能性を改めて認識させられるものであり、とても新鮮でした。お二人の今後のご活躍にも大いに期待しています。

最後に、受賞者の皆様には心よりお祝い申し上げますとともに、素晴らしい作品で会場を盛り上げてくださったことに深く感謝いたします。また、惜しくも受賞には至らなかった作品についても、それぞれに強い可能性を秘めており、今後のさらなるご活躍を楽しみにしております。

この度は「アート&テクノロジー東北2025」へのご参加、誠にありがとうございました。来年度のご応募も心よりお待ちしております。

2025年7月12日
岩手大学 人文社会科学部
教授 本村 健太